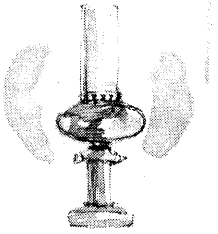
自由保育を考える
―堀合先生をかこんで―



堀合先生のお話の前に

先日の話し合いの中で「私たちは現場の生の問題を出したい。そして、共通の課題を成立させたい」という声があり、それを非常に大切なこととうけとめ、皆さんがおもちになった問題を、それぞれの小グループで話し合っていただきました。たくさんの問題が出て、それが報告されたところで終わっています。

前回の報告を大きくまとめてみますと、

1　自由保育、と通称いわれる、子どもの自発的な遊びを主体にしたような保育のあり方、そこでの問題点、技術的な方法に皆さんの関心が集中していた

2　三歳児保育

3　発達に障害をもった子の保育をどう考えていくか。また、どううけとめていくか

4　「遊び」の誘導、助言等

の四つにしぼられると思います。

（本田）

講演

堀合　文子

◆はじめに（教育はひとりひとりがうみ出すもの）

私は、先生方にむしろ教えていただかねばならない立場にあるのですが、ただ、私が経験したことをお話して、私もまた教えていただくし、先生方が考えて前進なさるキッカケになればと思ってお話いたします。私が申し上げることは、それこそ心理学者が話すこととはちがって、経験からの具体的なもので、むしろ先生方の方がよくご存じのことばかりと思います。これは、むしろ子どもたちから教えてもらったことで、もとはもちろん、学校で習ったこと、研究会などで教えていただいた理論

などですが、今こうしてふり返ってみますと、やはり子どもが一番の先生だと思います。

保育者というものは、毎日実践しながら教育というものを考えて、そこで作り出していかねばならないものじゃないか。きょうこの研究会で聞いたからそのままやりましょう、という訳にはいかないものです。まあ、長い経験をしたとはいいますが、私が経験をそのまま生かして、この前の五歳の二学期ごろにはこれをやったから、こんども五歳になったからやはりこれをしましょうとやっていたら、子どもたちにとってよいかどうか、現在の、今、目の前にいる子どもにあった保育が、果たしてできるでしょうか。それは、津守先生がよくおっしゃる〝目を働かさねば〟〝そこで考えなきゃ〟ということだと思いますが、やはり私なら私の組の子どもは、私がその子どもについて、そこで教育というものをうみ出していかねばならないものじゃないか、とそれを私は痛切に感じていますし、毎日がそれの連続だと思います。

◆自由な保育

私が考えますには、自由保育という言葉はないんだと思います。一斉保育という言葉もないんじゃないかと思います。一斉保育か、自由保育か、と判断することすらがおかしいんだと思います。幼児教育の原点にかえったら、そして子どもを見たら、その上に立ったものは一つしかないんじゃないか、と私はそういう信念をもってやっております。

自発性を尊重する保育―自由保育の中でも、いろんな自由な保育があると思います。私も長年、ここで自由だと思って、倉橋先生がよくおっしゃった、いわゆる自発性を尊重する保育だと思ってやってきました。でも、子どもを見ていると、やっているうちにだんだんと、これでいいのか、いいのかというのが出てくるんですね。本当に子どもたちを生かして生活しながら、そこに教育を入れていくというのと、ある点は自由に見えていても、遊ぶことだけが自由で、その中でやはり先生が何かまとめてやらないと満足しないというので、たとえば、音楽リズムだけ集めてやる、お話だけ集めてやる、そういう自由な保育もあります。中味は自由な保育でも、いろいろな考え方があるし、いろいろな信念をもっていらっしゃる方があると思います。私がこれからお話すると、私はどんな信念をもってやっているか、おわかりいただけると思います。

子どもに、自由ということはむずかしいことで、おとなだってなかなかむずかしいことです。本当に自由感を味わうということは、果たしてどれが自由感を味わっているのか、味わわせているのか、それは非常にむずかしいと思います。

◆子どもの遊びと自由な保育

ご存じのように、子どもには遊びが全生活です。このことは、言葉としては信じていると思いますが、むずかしいものです。「子どもの遊び」と「おとなのいう遊び」、言葉は重宝なものであって、しかも大変まちがいやすいものであると思うので、ここで一度考えてみたいと思います。

おとながこうやって勉強していることは、遊びじゃないですね。いわゆる勉強とか、仕事とかいいます。おとなが遊んでいるということは、遊んでるんですね。そこが、おとなは大変はっきりするんですが、「子どもは遊びが大切」といっても、その子どもの遊びは、言葉が遊びだもんですから、ついおとなの観点でもって解釈してしまうのです。「あそこ（ある生活の一部をさして）を自由にして遊びを尊重しているんだから、あれだって自由な保育だ」そういわれれば理屈で、まちがいじゃないんですね。そういうところに、自由な保育、自発性を尊重した保育のまちがいがくるんであって、わかってることなんですが、遊びという言葉だけでは、どっちにも考えられるので、この場をかりてもう一度先生方に考えていただきたいと思います。

本当の自由ってことは、その中に含まれるきびしさというものがあるんだと思います。その自由と規律といいますか、そこのかみ合わせがやはり幼児の世界にもあるので、自由だから大変自由で、「このごろは自由な保育が必要だといわれてるから、サア、遊んでればいいんだ、大いに遊びなさい。その中で勉強するんだから」といって、今度は、先生がうしろ手をして監督しているという、そういうところが、最近自由な保育というものが理解されてきたと同時に、心配な点で、実際、そういう話を時々聞きます。おとなでいえば、自由と規律で、子どもでいえば、自由感を充分に味わっていて、それでその中で教育をする。だから大変むずかしいのです。

◆質問に答えて

先日、本田先生に皆さんの質問をまとめて、箇条書きにしていただきました。私が、これから実際の場を説明していくうちに、おそらく、これらの答えが全部含まれるんじゃないかなと考えております。

自由な形態

これから申し上げるのは、結局は形態ですね。自由な形態の中に子どもをおいていくにはどうしたらよいか、ということを

お話したいと思います。

まず、遊びを尊重して大いに大事にしております。子どもが家庭から初めて幼稚園に来る、いわゆる入園当初ですね。入園当初の指導というのは、いろいろなところに書いてありますように、友だちに慣れて、先生に慣れて、安定感をもつようにと、その通りなのです。それを早くもたせるように、まずまず努力する訳です。その安定感の考え方に、いろんな解釈の仕方があって、それによって、ここが曲がったり、まっすぐいったりするんだと思います。

初めてだから、慣れないから、監督がいき届かないから、遊べないから、というだけで集めてしまうことを続けていったらいけないと思うし、できれば入園式のあくる日からすぐ、遊ばせなきゃいけないと思いますね。だけどこのところの指導をくわしくお話していると、入園当初だけで一時間ぐらいすぎてしまいますので、きょうは一応、大ざっぱなところを申し上げます。

まず、安定感をもたせるために、先生が一生懸命遊ぶんです。で、遊ぶということは、遊んであげるんですね。初めは、遊べる子どもも、遊べない子どもも、いろんな子どもが来てる訳ですね。その遊んであげている中で、子どもと先生のふれあい（このふれあいというのは、たしかにふれあうんですね。手をつないだ、ほらふれあった、というんじゃなくて）そこで精神的なものを作らなきゃいけないんです。

遊んであげる。もう初めは、むこうもあんまり知ってる先生じゃない、こっちもお子さんは初めてだというので、たしかに精神的なものは全然ないんです。初めてのふれあいで、遊びから始まるんで、絵本を読んであげるとかで具体的に始まってくるんですけど、遊んであげながら、精神的ふれあいということを初めから頭にいれていくということが、私は大事なことと思うのです。これをしないと、いわゆる自由な保育というものはできないんですね。

教育というものは、教師と生徒が一体にならないと、この上に立つものはみなくずれていく。このことなのです。とくに幼児の場合は、教師との間にみぞがあってはできません。自分ではそれを、精神的なものはやっているんだといっても、そこにまた、ちょっと横道になるんですが、先生の気のもち方ということもはいってきて、奥が深いというのはそういうことが深いんで、大変むずかしいのです。何しろその安定感という中には、遊びながら、遊ばせながら、先生と子どもが本当に一体になる方向に考えてやっていきます。急に一週間や一ヵ月では、一体になれません。もちろんそれはできることじゃないのですけど、そういう気持をもって子どもにふれなきゃダメなんです。

専門家の幼児教育——遊びの指導

そこで、そうやって遊ばせますね。そしてある程度時期がたてば、そうですね、まあ五、六月ぐらいになれば、ある程度三歳でも四歳でもまあまあ何とか、遊んでくれるんです。友だち関係なんかも、浅くてもまあできてきます。そうすると、ここからが大事だと思うんですけど、先生は「このごろよく遊んでくれるわ」と、自分も努力しましたからね、一段落ついちゃうんです。しかしこの一段落っていうものは、資格のない先生でもできることだと思うんです。それは、むしろ行動、労力でもってしっかり遊ばせりゃ、ホントに遊ぶようになるんです。高校を卒業したての先生や、まだ保育の勉強をしてない方でも、「入園当初の間は遊ばせてあげなさいよ」といえば、一生懸命無邪気に遊ばせてくれたら、ホントに遊んでくれるようになります。

そこで先生が「このごろ、よく遊んでくれるようになったのよ」といって離しちゃってはダメなんです。そこからが、専門家のやらなければいけないところで、これからが幼児教育だと思います。ここまでは、今申し上げたように、まあこんな区別をしては悪いですけど、保育の勉強をしない方でも、一生懸命すればここまではある程度いくんです。ところが、ここから先が、今、これから申し上げたい、遊びの中へ教育を入れていくところじゃないかと思います。

「よく遊べるようになったのよ」といって「じゃあこれを出しましょう」と、先生の計画をどんどん進めていったら、これはやはり、この中で子どもの創造性は養われないですね。だから、そういうところが、ちょっとした紙一重のところなんですが、これだけは、私も自信をもって申し上げられることだと思います。そこでつき離さないで、次にくることがいわゆる遊びの指導なのです。

子どもがよく遊ぶ。何しろ子どもは、ほうっておいたって砂遊びだってある程度のものはやっていきますよね。五歳になれば五歳なりのものは発達してきますけれど、それじゃいけないんですね。そこで、大変立派なものをやらねばとなると、今度はあべこべに、先生という意識を出しすぎて、「計画をこうたてて、じゃあこれはこうしましょう」といって、入れてもいいんですけどもね。そっちに重きをおいちゃダメなんです。そうじゃなくて、もうちょっと遊びってものをながめて、そのながめてというのは、津守先生がおっしゃる〝見る目〟、その〝見る目〟で子どもの側になったり、また傍観者になったり、先生の立場になったりして〝見る目〟を働かせなきゃダメなんです。そして、遊びというものを「アッ今、こうだから、ここをこう

いうふうに」というふうに、遊びの指導というのはここから始まるんです。これは、専門家の先生でなきゃできません。心理学もこういうところから働くんです。「働くんですよ」といっても、まあちょっと横道ですけど、私は、学問はいくらしたっていいと思うんです。高度な、それこそ博士になったっていいと思うんです。ところが、子どもの前へ出たら、みんなそういうようなものはぬいですてて、もうホントに純真な、子どもの気持になってそこへ出なきゃダメなんです。それが、心理学を学んでると、心理学を外に出すからうまくいかないんです。そうかといって、幼稚園の先生は少し勉強しときゃできるのかっていうとそうじゃないですね。私はよく笑われるんですけれど、それこそやり始めたら、心理学の博士、理学博士、医学博士、すべて博士ぐらいの高度な知識をもっていないと、幼児教育というものはできないと思います。ところが、ここのところをうまく使わないと大変なことになってしまいます。学問のための実験材料にすぎなくなるのです。

遊びの指導というものは、それこそ五歳で卒業させるまで連続するものです。その遊びの中に、その個人やいろいろの事柄がある訳で「砂場をやってるから、砂場のグループで、遊びの指導をしなさい」といわれたから「さあ砂場でいっぺんにやりましょう。きょうは砂山を作って、明日はこれをして」とかこういうのじゃないんです。子どもたちが遊び始めると、四十人いれば四十人、ちがうわけですね。このちがうものを、十把一からげにやるってことは絶対幼児期にはできないということは、保育をやっている方ならわかると思います。子どもを見ている人なら必ずわかります。先生が自分で「先生」意識を出して高いところにいたら、つい先生の計画を出して「ああ、やっぱりこうやらなくちゃ、一斉じゃなきゃダメだわね」ということになっちゃうんです。大変僭越ですが、そういう先生は子どもを見る目がない、と思うんです。はっきりいって。

自由な保育の原点にかえる

そこでまた、原点にかえるってことを考えていただきたいんです。幼児教育では、何と何をさせなきゃならない、というんじゃないですよね。それは先生方、おそらくわかっていらっしゃると思いますけれど、いざ子どもの前に出ると、わかっていらっしゃる方は少ないと思います。ここで原点にかえらないと、本当の自由な形態の中における保育というものはできないんです。

それはたとえば、一番わかりやすいのは音楽リズムです。音楽リズムは、リズム感を養うとかいろんな項目がいっぱいあります。それを養わねばならないことは、重々わかっています。

しかし私は、原点の考え方の一つとして、こういうふうに考えたらいいと思います。実際家の立場からですけれど、いわゆる幼児期にはいったい何をやったらいいのか、そのやったらいいかってことがぬけてて、ただ先生の満足感から、ああリズム感が養えたな、チョウチョがうまくいった、リズムに合うようになったとか、音楽は小さい時から訓練しなければとか、そういうことについ走るんです。私も、たしかにそれをやってきた時代があります、ところが、どうしてもそれをやってるうちに、満足できないんです。子どもの顔がちがうのです。何かもっと個人というものを考えないといけないのではないか、と考えましたよいました。いつも、迷ったら原点にかえって、そこで、いったい幼児期には、—幼児期っていうのは、小学校に上げるためのものじゃないんです—あの子どもたちが成長して、社会人として、それこそ周郷先生のお言葉を拝借すれば世界人になるわけでしょ。そうなるためにはここで、幼児期にどういう人に育ててあげたら一番いいのか。それを子どもの上に表わす、どういうふうに遊びの中で養っていくかということ、それが私は一番、自由な形態の中における指導の要点だと思います。

極端にいえば、絵なんて一度もかかなくたって、ちゃんと自分が工夫して考えて、そして将来大きくなった時に、自分の考えをもって行動できるような人間に育ってほしい。人間として必要な、精神的なもの、そういうものを小さいうちから育てておけば、たとえ絵という場面では表われなくても、ほかの場面で育っていればよいのではないでしょうか。

それを遊びの中でするんです。砂場だから、それを製作と関連させるんじゃなくて、砂場の中でもこういうことが養えるわけです。鬼ごっこの中でも、お弁当を食べることでも養えるわけです。けれども、子どもの中にそういうものが養えたかどうか、また養っているかどうかは見えないんです。見えないから、それが大変困るんですけれども、それは卒業する時に、見る方が見れば、きっと見えると思います。楽隊ごっことか、絵をかくとか、そういう見えることとちがって、工夫力を養うとか、創造性を養うとかということは、ふだんは見えないことなんです。

上手な保育のコツ

見えない、わからないような保育を上手にするのがコツなんだと思いますが、そのコツをなるべく具体的にお話して、あとは皆さんに考えていただきたいと思います。

まず、先生が遊びの中にはいらなきゃならないんです。それが遊びの指導で、いっしょに砂場でも何でもしなきゃならない。ある程度年齢によって砂場の遊び方も、考え方もちがってきま

す。初めはおだんごをこんなことをしてやっていても、だんだんに子どもだけでほっておいてもできます。遊びが発展することだってありますが、先生がその中にはいって、幼児と同等の年齢になって、幼児の友だちになって遊ぶ、ということで、でてくるものがちがってきます。遊びの中に出てくるいろいろな事件や事柄を、機会をとらえて、いけないことはいけない、発展させられるようなものは助言を与える、こういうことがその中でくり返される、これがいわゆる指導ですね。

もちろんこうすれば考える。子どもが考える力というのは、友だちとのやりとり、それから先生といっしょにやること、事態でいろいろ拘束があるとかがこんがらがって、統合できるようになって初めて、その中で養われる。そして子どもの方もそこで初めて、遊び方などもだんだんと進歩してくるということです。砂場で山を作った、じゃ次はトンネルというような遊びの指導とはちがうわけです。それだってもちろん考えなきゃいけないですけれど、それ以上に進歩的なものを、遊びの中で指導しなきゃいけないわけです。

若い方々へ

私たちおとなは、いろんな立場に自分を変えていかなきゃならないんです。だから、ある面は、みんなよく遊んでいる時、これをこわしちゃいけない。よく学生さんが、子どもに何かいってもらいたいという気持、それから何かいってやりたいという気持があって――それはまだ無理もありませんけれど――「何してんの」「それ何、いいわね」とすぐ声をかけちゃうんです。すると子どもの気持がみんなおとなの方へ向いてきちゃうんです。せっかく一生懸命やっていたものも、おとなのひと声で変わってくることもあるし、せっかく継続的に発展すべき遊びがとぎれてしまう。この言葉かけというのは大変むずかしいと思うんですけれど、何しろ、まず、子どもの友だちになってはいっていくことです。

三歳、四歳ぐらいだとまだ遊び方もあまりわからないし、自分で工夫する力も養われていないので、やはり先生が中心となる形の方が多いですね。それが毎日くり返されて、五歳になる間にいろいろな力も養われて、友だちと協力したり相談したりして役割をきめるとか、そういうこともできるようになってきます。でも、よく遊べるから先生はもういらない、というんじゃないんです。やはり見ていて、あの遊びをもう少し発展させよう、もう少し伸ばしてあげよう、ということが日々くり返されている訳です。

学生さんともよく話すことですが、まず、自分を変えていかなきゃできないんです。本当に自分が無邪気にならないと、子

どもといっしょに遊べません。だからあるときは、はずかしいようなバカげたこともやらなきゃならないし、いわなきゃいけない。はいるといっても、はいりこんじゃって、まわりのことが全然わからなくてもダメなんです。先生が忙しいっていうのは、いっしょに遊びながら、まだほかに三十なん人いますから、ほかの人のことも把握していなきゃならない。入園当初の安定感をもたせるというのも、結局、先生と幼児のつながりを作らなきゃいけないのであって、遠く離れていても細い糸で先生と幼児がつながっている、精神的なつながりというものがなきゃいけないわけです。その状態でこの遊びの指導がされるのです。慣れないうちは、いっしょに遊ぶことに没入して、子どもがケガをするなんていうこともあります。そんな時は、ちょっと遊びながら周囲を見るなり、気をくばるなり、先生の行動の中味はいっぱいあるわけです。

商店の子どもは、店員さんなんかがからかうのね。それからおじいさんなんかも、子どもがかわいいからからかいます。からかうというのは語弊があるかもしれませんが、かわいさあまりにからかうわけです。そういう遊びじゃダメなんです。真剣、やはり真剣と誠意です。そういうものが表われ出なきゃ、子どもは感じてくれないわけです。だから、ただからだだけふり返って、いい顔をしてちょっとこうして、という遊び方ではダメなんです。同じ遊び方でも先生は、遊び方、精神のつながりのある遊び方というものを工夫して、努力しなきゃ、子どもたちにすまないと思うんです。

ただ遊んであげるというんじゃダメなんです。若い方ってのは夢中で遊ぶ。この夢中が大切であり、また欠点を生むこともあるんです。私みたいにルーズになると、まあ適当じゃないけど口先だけになってくると、こういうのは子どもに通じないんです。通じるけど、それがやはり、身についた教育として通じないんです。

助言の与え方

同じ言葉をかけて、その遊び自体、それから、子ども自体をひっぱり上げるということがその中で行なわれるわけです。子どもは、ひとりひとり顔がちがうように、みんなちがう個性をもっているし、能力をもっているんだから「さあみんな、ああしましょう、こうしましょう」でいかないのが幼児期です。やはりひとりひとりの子どもについて考えて、助言を与えてあげなきゃいけないんです。それはやはり、担任じゃないと、ポカンと行った人にはわかりません。あの子の性格はこういうふうでこうなんだから、パッといった方がいいとか、誘導的にいった方がいいとか、いろんなことが担任なら考えられると思い

ます。そういう助言が大事なんです。

もう一つは、いい例が食事の時なんかです。まあ、ガヤガヤしていますね。そういう時に静かにさせたいって、それは誰だって思うことね。ところが、いろんな方法があります。ピアノをポンポンポンとたたいて「ちょっとみんな静かに」という場合、手をポンポンポンとたたいて「ちょっとみなさん」ということもあります、まあ昔はそういうのもありました。それから、言葉かけに慣れた先生がいらして、言葉はやさしくしても、やはり子どもが自分からやる気を出すような助言が必要なんです。たとえば、ベテランの先生なら誰ちゃんにこういうふうにしてもらいたい時には「誰ちゃん、行儀よくおひざに手をおいて」「じゃあ誰ちゃん、もっと……」ってこともいいますけど、それよりも、たまたまとなりに最初からお行儀よくしている子どもがいたら、その子どもの方をほめて、行儀のわるい子どもが気がついて、自分からそうするような、そんな言葉かけをします。これは皆さんよくやっていらっしゃることと思いますが、それと同じようなことが、生活の遊びの中で使われなきゃいけないんです。食事の時とかかえりの時なんかはよく使われていると思いますけど、遊びの中にはあまりそれが使われないわけです。

そこで〝見る目〟というのが必要になってくるんですけど、よく遊びを見て、言葉をかけるわけです。その助言には、ほめる時とか、いろいろ種類があると思いますが、その助言がすなわち指導ですわね。それが中心になって保育の遊びの中でくり返されているわけです。お子さんが行動している、それを先生が見て、それをパッパと見ただけでパッというんじゃなくて、そこで、あのこはこうでこうだから、と考えるわけです。考えてから、さっと先生が行動に出すんじゃなくて、やはり行動というのは言葉とかじゃなくて、一度自分の頭にかえして、そこで考えて、それから今度は子どもに出す訳です。それがつねにピッピッピ、と電光石火のように、保育者の目で見て、頭へきて、頭で考えて、それがまた子どもに出て行く、行く時に行動なり言葉なりになるんです。

その経路は何でもないことなんですけど、ここに私は学問を使うべきだと思うんです。ここの利用のよしあしで、だいぶ、子どもの教育もちがってくるんだと思います。それが前にも申し上げた、専門家と、そうでない方とのちがいにつながるんです。ただ、ゆっくり考えるといっても、おちついてちゃ間に合いませんよね。子どもはしょっちゅう活動して生きてますから。ですからそれが頭の中では、ピッピッピと早く働かなきゃいけないんです。

音楽リズム

ひとつこの中で問題になるのは、私も苦労しました音楽リズムです。音楽リズムの中にはいろんな種類があって、楽器だとか、歌だとか、鑑賞だとか、動くこと、いろいろあります。楽隊というのは、集まってやって、合奏っていうのは、みんながきれいに合わせることによって効果があるんです。だけどそれは、おとなの満足です。原点にかえるってことはここへもってこなきゃダメなんで、やはり幼児には、音楽リズムの中の指導はどこを見たらよいのか、と考えなおすべきです。だから、合奏は割合にやりいいですね。そうはいってもそれはやってごらんになった方でないとわからない。やってみて「次々、楽器を交替してやるんですよ」といった指導はある程度ベテランなら、誰でもやれます。歌だってその中の指導は、経験と工夫さえあればできることだと思います。でも、それをやってて、子どもの顔から心を読みとれないような先生ならダメなんです。あーあ、といってやってる、なんてのじゃダメなわけです。

それをくり返しているうちに、参加しない子どもでも、子どもは、音が出れば必ず、耳にはいっているんです。そこを私たちは心理学を応用すべきで、子どもはおとなの話を、きいてないようでもちゃんときいてるって特徴があるでしょ、それなんです。私のクラスでもひとり、その子だけ合奏をしないんです。〝卒業までにしなかったらどうしよう〟なんて悩んだんですね。ところが、ある日、それこそある日、突然、ひとりで楽隊と同じことをやりながら歩いているのね、ハンドカスタや、指揮に興味があったらしくて、指揮をやりながらただへやのこっちのすみから、あっちのすみまで走っているんです。私は「ああ、もうこれだけしてくれりゃ満足だ」と思いました。それだけあの子の頭には、もちろん楽隊なんてしやしませんよ、その子は。いったいどこで聞いてたのかしら、と疑問に思ったくらいの子どもでしたけど、それが全然楽隊ごっこじゃない時にやってくれて、ああもうこれで満足した、と思ってつくづく見ていました。こういうことが原点にかえるってことじゃないでしょうか。

それからリズム、リズム感を養うとか、表現力を養うとかということもあるし、いろんな要素があります。音楽リズムの方から考えると、これらを養うのは当然のことなんです。ところが、先生の方は、みんなを集めて、ピアノをひいたり、テープレコーダーをまわしたりして、音楽リズムとして自由表現をさせたり、リズム遊びをやれば大変満足ですよね。でも果たして、幼児期の音楽リズムはこれでよいかどうか、私はずいぶんいろいろ悩んだり考えたりしたのですけど、子どもの遊ぶ中に、生活に、リズムがあるわけでしょ。見ていると、積木をよいしょ、

よいしょと持ってくるんでも、廊下をスキップしても、すべり台をすべる、ブランコをこぐ、そのリズムを大事にしよう〝生活の中でやっていったら何とかなるんじゃないか〟と思ったんです。

たとえば、ブランコをこぐのでも、いちいち神経を使って……。それから、子どもがちょこちょこきて手をつなぎますよね。そうしたら、この時とばかりスキップのリズムってものをひとりひとりみてあげる。三十人いれば三十人、スキップを一人一人させて、その時々にその人にあった伴奏をした時期もありました。〝それと同じことを、生活の中でしたらいいんじゃないか〟そう思って、それを大事にしました。まだまだ例はいっぱいありますが、そういういわゆる生活の中のリズム―生活のリズムっていうとまたちょっとちがうかもしれませんが、その中に表われるリズム―そこから指導が始まるわけです。

そこを、「好きなようにやればいい」というんじゃなく、そこから先をいわゆる音楽リズムの指導をやればいいんです。そのリズムは、いろいろな運動によってちがうわけですが、そのちがいをちゃんと養わなければいけないんです。不安ながら私はこういうふうにやってきましたが、あるおとなの本でドイツの体育学の先生のお話ですが〝おとなの世界でも、本当のリズムは全生活の中にあり、それを大切にするのがひいては音楽の、またダンスのリズムにつながるものだ〟ということがあって、自分なりに安心しました。

そのかわり、ただ子どもと手をつないで、いっしょにスキップをした時だけじゃないんです。次に要求されるのは、私ども、自分自身が高まらなきゃダメなんです。先生が、相当高いリズム感覚、表現力などをもっていると、必ずそれが生活に出るんです。それが要求されるんです。音楽リズムは、むしろ子どもが楽しんで、好きなようにやればいいような表現は、たしかに自由です。「喜んでやっているからいいじゃありませんか」それは一つの理屈です。それを「ちがいます」とはいえないんです。それはやってみて、これでいいのかしらと、それを感じとらなければダメです。私も「せめて少しぐらいは自由にしましょう」と並ばせないでお遊戯をして、自分の気安めにしていたんです。でも、どうしても子どもを見ていると、何か不満があってやりたくない子どももあるし、そこに何か方法を考えなきゃいけないんじゃないか、ということで、三年間考えてやってきました。三年目の五歳児で、リズム感は決して劣ってはいないんです。前にもった子どもたちよりいろいろ考えてくれるんです。そういう点がうれしかったところで、原点で養われたものが、音楽にぶつかればその面で、制作ではまたその面で劇遊びでも同じように、その真に養われた力が働くのです。

リズムの原点にかえれば、こういうところを養って、ただ音楽にのる気持がある、音楽に興味をもつ、これも、音楽だけじゃなくて、何でも一生懸命やる、という原点も原点、みんなが知っていて、どこかで忘れさられたようなものにかえりさえすれば、そこでちゃんと養える。そしてこれを通して私も子どもも高まるわけです。こういうことが真の幼児教育じゃないかな、と最近思っています。

おわりに

私は、子どもの顔を見ながら、発達を見ながら、そして反応を見ながら、そこでむしろ子どもに教えられたんです。平気でやっていた自分が大変恥ずかしいと思います。やはり、見る目、観察記録だけとっておくんじゃなくて、あの目ね、見る目っていうのは本当に保育者には必要です。この目がしっかりしないとまちがってしまう。いくら理論がたっても、この目がまちがっていれば、子どもの発達を阻害してるんじゃないでしょうか。

現代の子どもは、ここの幼稚園でいいますと、出ればすぐ自動車道路で、家へ帰れば庭のある方はほんのわずかで、マンションみたいな所で、しかも外へ出ると危いといって、家の中で絵をかいたりテレビを見るという生活をしています。何かひねればお湯も出るし、何でもできる。だからなおさら、こういう自由な形態の中の保育ってのが要請されます。もっともっとからだを使った遊び、もっともっと遊びを尊重した生活をさせて、それでいて遊ばせっぱなしじゃなく、そこに教育を入れていくのが、とくに現代は必要です。

また時代の進歩ということも非常に大切なことだと思います。時代によって子どもの教育も変えていかなきゃならない。それも、世界の広さ、動きの中から。いくら経験をつんでも、今までの経験だけでは無理なような気がして、ここで子どもを見て、考えて、新しく作りあげていかなきゃならない。そういう精神をつねにもっていなきゃいけないと同時に、今度は自分を作りあげていかなくちゃならない、そんなことを反省しております。

考えるということは言葉ではやさしいですけれど、そこで教育を生み出していかなきゃならないんです。AさんならAさんの教育、BさんならBさんの教育を作らなきゃならない。先生はその作れるだけの能力を身につけなきゃならないと、つくづく思います。皆さんのご参考になったかどうかわかりませんが、これでおわらせていただきます。

教育の創作、動きの創作などについてお話しくださいました

が、とくに動きの創作は、動かないで伝えるということのむずかしさの、ポイントを話されました。

グループで、このお話を中心に深めて、全体討論に質問なり、課題をなげかけてください。（全体討論司会　大戸）

◆**質問**

1　聞くことの指導方法

2　遊びが広がった先で、ひとりひとりの子どもの活動（個性）をどうみるか。

3　ひとりひとりの子どもの集団のとらえ方（ひとりひとりの問題を、クラス全体にどうなげかけるのか、ダメな子をダメでないようにどうしていくのか）

4　集団の高まりと個人の高まり。カリキュラムについて

5　生活の中でのリズムを大切に、という時、その結果を評価する際の担任と第三者の評価のちがい

6　保育プランについて

7　遊びの指導をもっと具体的に

8　活動内容と評価内容の関係。教師と子どものつながり

◆**質問をうけて**

●日案、カリキュラムはないことはないんです。私自身怠けていますから、言葉に書かないんで、書けといったら今でも書きます。その日案、カリキュラムは、前の何曜は何と何っていうんじゃありません。あれは、ガラッと変えなきゃいけませんし、理想をいいますと、ひとりひとりの日案があるべきだと思います。

●集団の中の個、ダメな子とか、力のない子とか、視野にはいらない子だとか、そんなのが共通だと思いますけれど、さっきのことをもう一度くり返して、もっと具体的に話さないと、私の言葉がへたなので、わかっていただけなかったのかなという悲しさがあります。ダメな子も、視野にはいらない子も、自由に遊ばせておいて、自分が出かけていかなきゃダメなんです。一斉にやって、自分は大変把握しているようですけど、先生のひとつの言葉でやられてる訳でしょ、自分は満足して、みんな徹底していると思っても、それはちがうんで、ダメならダメで、自由な場において、はじめて助かるんじゃないでしょうか。そこでその子にあった教育を先生が考えなきゃいけないんです。顔がちがうように、それぞれちがう教育をするのが幼児教育じゃないですか？　と私がまとめてしまうのもいけないんで、そこで初めてその人のよさっていうのをひき出して、ダメならダメなことで考えてあげるし、ただ自由に遊ばせているだけじゃないんです。

細い糸で、というのを覚えてくださっておっしゃるんですが、流れが止まってしまうんじゃないかというのは、結局、それま

でに毎日毎日、それを自分が接触して作るぐらいのいきおいで入園児をうけとめて、からだを動かして、神経を動かして、先生も人間ですから、遠くの人は見えないけど、精神的つながりを作っておかなきゃだめです。

で私、おかしな話ですが、エプロンを洗うんですよ。おかあさんの手前をよくするために洗うんじゃなくて教育的意義をもって洗ってるんです。こっちだって忙しい時は洗えませんけど、初めのうちはなるべく洗って帰すようにするんです。五歳の終わりごろは、むしろきたないのをもって帰らせます。それだけの差があるんです。どうしてかって、おかあさんは、子どものいろんな世話をするわけです。それで親子のつながりができるんでしょ。赤ちゃんの時から。それを何とか、幼稚園で作りたいわけです。それにはせめて〝私のエプロンを洗ってくれた〟そういう先生、それは子どもの方がはるかに敏感なものをもっています。初めはともかく、いきなり他人と他人とのふれあいですから、そこを何とか、親子関係に近いような、密な関係を作りたいと思うからやるんです。そういうことをやってれば、みんな解決するんだと思います。

そのかわり、先生の神経は大変です。大変頭を働かさなきゃできない仕事です。それはお互いにわかってるし、それで生きがいだか何だかお互いに感じるんじゃないですか。人間ですから、失敗もしたっていいんじゃないですか。だけど先生が謙虚な気持で、その子どものために考えてあげる、その気持がやはりその子どもに通じるんです。

まだほかにもお話したいことはありますけれど、教育とは何だっていうことを掘り下げれば、みんな解決できるんだと思います。正しい幼児の教育原理は一つしかないのです。お互いに正しい理念の上に立って、勉強してやっていきたいと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）